

いのちの海と空と大地



原発のない世界を求めて ニュースレター

発行： 日本聖公会「正義と平和委員会」原発問題プロジェクト

福島第一原発事故の今とこれから

河田昌東（かわたまさはる）

NPO 法人チェルノブイリ救援・中部

福島第一原発事故から 10 年経った。廃炉に向けた作業は未だに先が見えない。メルトダウンした炉心がどうなっているかは 10 年後の今も良くわからないからだ。

●福島原発の汚染水処理問題が今、大きな話題になっている。事故以降今も炉心冷却のために水を毎日 140 トン以上注入しそれが汚染水としてたまり続けている。その量は 120 万トン、タンク 1200 本を超えて敷地を埋め尽くし、廃炉作業にも差支えが出始めている。更に今年 2 月 13 日に発生した地震で、溶けた燃料がたまっている格納容器の亀裂が広がり内部の水位が低下した。その為東電は注入する冷却水量を増加せざるを得なくなり、汚染水の量は更に増加している。4 月 13 日、政府は漁業関係者はじめ多くの反対にも関わらず、閣僚会議で汚染水の海洋放出を決めた。

事故以来、これまでに海に流した汚染水の放射エネルギーはすでに $50\sim 60 \times 10^{15}$ Bq に達しており、国際的に放射能の海洋投棄禁止を決めたロンドン条約（1975 年）に違反している。それをさらに増やそうというのだ。国際的に大きな批判を呼ぶのは間違いない。

トリチウム汚染水は現在の技術では処理できない、として国と東電は海洋放出を主張しているが、コストを優先し技術開発を行わなかったからに過ぎない。原子力村の専門家はトリチウムが β 線を出す放射能でエネルギーが小さいから大丈夫、と主張するがそれは間違っている。トリチウム水を放出すれば海産物がトリチウムで汚染し遺伝子 DNA が破壊されて被害がでる。トリチウム汚染水放出は風評被害でなく「実害」が起こるのだ。

●最近明らかになった事実は更に今後の廃炉作業の困難さを示す。原子力規制委員会の調査で、爆発しなかった2号炉の格納容器上部の蓋(シールドプラグ:重量465t)がずれて強烈に汚染しており撤去困難な事が分かった。汚染レベルは溶けた燃料(デブリ)並みで、人が近づけば即死する。蓋が開けられなければ内部の汚染物は撤去出来ない、即ち廃炉作業が出来ない。事故の際に水素爆発したのは1号炉、3号炉と4号炉だった。ところが最も大量の放射能を放出したのは爆発しなかった2号炉である事は早くから分かっていた。1,3,4号炉の水素爆発は炉心で発生した水素ガスが外部に漏れ出て、建屋内で爆発したが放出放射エネルギーは多くなかった。何故、爆発しなかった2号炉から大量の放射能が漏れ出たかはこれまで不明だった。今回の調査でその原因が明らかになった。内部の炉心が溶けて高温・高圧になった際に、他の原子炉では可能だったベントが2号炉では失敗した。ベントとは炉内の放射性ガスを地下の水タンクを通して放射能を減らしてから外部放出するシステムである。1、3号では出来たベントが2号炉では出来なかった。その為、高温高圧の炉心ガスが本来なら開くはずのない重さ465トンもの格納容器の上蓋を押し上げ、その隙間から放射能が大量に大気中に放出された。その際に蓋が高濃度汚染したのである。

●51年前の1970年3月15日、大阪万博会場に若狭湾から国内で初めての商業用原発から電気が送られ、「原子力の平和利用」にマスコミは沸いた。しかしその当時から事故の危険性や廃棄物の問題は指摘されていた。しかし電力会社は勿論、国や原子力の専門家達は「原発事故は100万年に一回しか起こらない。万一事故が起こっても放射能は5重の壁に守られ外部には出ない」「廃棄物はその中何とかなる」と反論した。事故対策ばかりか、廃棄物処理すら未だに目途が立たない。全ては嘘だった。



河田昌東氏

1940年生まれ。名古屋大学理学部大学院理学部
分子生物学研究施設大学院卒。分子生物学者

以下のYouTubeインタビューもご視聴ください
トリチウムの人体への影響を軽くみてはならない
https://www.videonews.com/interviews/20210417_kawata